【追悼特集――森川眞規雄先生（研究論文）】

日台交流史への社会学的接近

――2つの「出会い型調査」を通して――[1)]

河口　充勇
KAWAGUCHI Mitsuo

1　序

1895年、日清戦争後の下関条約により台湾は日本の植民地となった。その後、第二次世界大戦が終結するまでの半世紀、台湾から内地へ、内地から台湾へと様々な境遇の人々が移動し、様々な形の交流をもった。戦後においても日本と台湾は複雑な政治的関係に置かれながら、緊密な経済的・文化的交流をつづけてきた。

本稿は、日台交流史にかかわる2つの調査プロジェクト（「同志社と台湾留学生」、「台湾シリコンバレーのルーツ探し」）の成果をリフレクティブに再検討するものである。

本論に入る前に、これら2つのプロジェクトに共通するキーポイント2点にふれておきたい。1つは、2000年代に実施された調査という点である。かつての国民党独裁政権下においては、台湾はあくまでも中国の一部であって、台湾そのものの独自性を問うこと自体がタブーとされたが、李登輝政権下（1998～2000）で推進された「本土化」「民主化」政策を契機として、それを問い、表現することが大幅に自由化された。その結果、台湾固有の歴史・文化・アイデンティティへの社会的関心が高まりをみせた。こうした一連の政策変化、意識変化を背景に、日本統治期に対する歴史認識のあり方も大きく変わり、できるかぎり「理性的」な視点から、それを「台湾史」の一部としてとらえようとする趨勢が顕著なものとなった。2つのプロジェクトは、このような時代の「社会的要請」を強く意識したものであると同時に、新たな研究の可能性を開拓しようとするものでもあった。

もう1つは、人との「縁」を重視した調査という点である。本稿では、宗教社会学者の井上順孝國學院大學名誉教授が提起した「出会い型調査」という概念を援用する。井上教授は、現代宗教を対象とする実態調査の可能性と課題について検討した論文のなかで次のように記している。

> 実態調査においては、研究者と調査の対象となった人間とが、どのような人間関係にあったかによって、調査結果にも微妙な違いが出てくることが想定される。また、調査後もその人間関係が、継続されることがある。そこでは、調査された事柄以外の問題で、調査の余波が及ぶこともありうる。ここに両者の相互影響というテーマが設定される。その影響の度合いは、当然のことながら、調査方法によって大きく異なる。…（中略）…
>
> ここで、研究者とインフォーマントとが、パーソナルに向かいあい、またそうして向かいあったことが、新たな人間関係をもたらし、以後も相互に影響を及ぼす可能性のある調査を、「出会い型調査」として、あらたにカテゴライズしたい。調査という行為が、結果として一種の出会いの場になるという側面に注目しての命名である（井上 1992 : 150）。

2つのプロジェクトは、まぎれもなく「出会い型調査」であり、どちらも研究者・インフォーマント間の相互影響を排除するのではなく、むしろそれを積極的に活用しようとするものであった。

2つのプロジェクトは、もともと直接的なつながりがあったわけではないが、ある「出会い」により交錯することになった。その「出会い」の相手は、1回だけ顔を合わせて雑談を交わした人物であるが、この「出会い」により、筆者自身も意識していなかった、両プロジェクトの存在意義が明らかになった。

つづく第2節と第3節では、「同志社と台湾留学生」プロジェクトと「台湾シリコンバレーのルーツ探し」プロジェクトのそれぞれの取り組み内容について整理する。そして、第4節では、ある「出会い」によって明らかになった、両プロジェクトの存在意義に言及し、結びに代えたい。

2 「同志社と台湾留学生」プロジェクト

本節では、「同志社と台湾留学生」プロジェクトの取り組み内容について、①研究経緯、②研究対象と社会背景、③アウトプットと社会還元という項目に沿って整理する。

2-1 研究経緯

「同志社と台湾留学生」プロジェクトとは、2001～02年度に同志社大学文学部社会学科社会学専攻（当時）で開講された「社会調査実習－同志社と台湾留学生－」（担当者：森川眞規雄教授）とそこから発展した諸企画を指している。

「同志社と台湾留学生」というユニークなテーマで調査実習を開講しようと考えるに至った経緯について、担当者の森川教授は、2001年度末に刊行された調査実習報告書の序文で次のように述べている。

そもそものきっかけは、学内で発行されている校友会誌『同志社タイムス』に毎年寄稿される陳誠志氏（昨年まで同志社校友会台湾支部支部長）の支部通信であった。後に知ったことだが、陳氏の報告はずいぶん以前から送られてきていたのだが、筆者が注意を向けるようになったのは今から6、7年前のことであったように思う。あるとき何気なく『同志社タイムス』を読んでいると、いきなり熱気あふれる陳支部長の言葉が目に飛び込んできた。陳氏の文体は独特で、いわば「日中混交文」とでも呼べるものだが、そこには善意と愛校心が充満しており、時にはそれが爆発し、そのために文章は時折ほとんど意味不明となり、しかし、そこにこめられた“思い”は間違いなく読者に伝わるという、規矩をこえた“よい文章”の見本ともいえるものであった。それ以来、毎年陳支部長の文章にふれるたびに、この陳支部長の、そして、陳支部長と共にある多数の台湾校友の、熱い思いを何らかの形にしたいという思いが強まってきた。…（中略）…

もともと調査の構想は陳支部長の熱意がきっかけとなったとはいえ、社会調査であるかぎりそこにはそれなりの社会学的意味がなければならない。そして、この点に関しての筆者の意図は、外国への留学という経験が帰国後にどのように個人または社会のレベルで理解され、利用され、影響を与えるかというインターエスニックな状況で留学という文化経験がもたらす効果を理解することであり、また、逆にこうした留学経験を定点としてみるとき日本における大学教育にどのような新しい見方が可能かということであった。（森川 2002 : 1）。

こうして2001～02年度に「同志社と台湾留学生」をテーマとする調査実習が開講され（2年間

に延べ 15 名の学部 3〜4 年生が履修)、当時大学院森川ゼミに在籍していた逢軍氏と筆者がティーチングアシスタント（TA）を務めた。両年度とも実習期間は 1 年間の長丁場であり、しかも、夏季休暇期間に 2 週間台湾で現地調査を行なうというハードな内容であった。

実は、森川教授が調査実習の開講に向けて「下準備」を行なっていた頃、偶然にも同志社大学内において一足早く「同志社と台湾留学生」に関する調査に着手していた教員がいた。言語文化教育センター（当時）の阪口直樹教授（専門は中国現代文学）である。阪口教授との交流について、森川教授は、2001 年度調査実習報告書の序文で次のように振り返っている。

> 研究者の性で、筆者の最初の思いは「3 年前に調査を始めていれば、阪口教授に先行されなかった」というさもしい思いだったが、その後、阪口教授から送られてきた論文は詳細を極めたものであり、筆者の遠く及ぶものではなかった。ともあれ、阪口教授はその後も協力・助言を惜しまれず、さらには快く「実習」の学生のために特別講師も努めてくださった。もちろん、阪口教授の論文が、その後のわれわれの調査におおいに役立ったことはいうまでもない（森川 2002 : 1)。

2-2　研究対象と社会背景

戦前の留学生に特化した阪口教授の研究との重複を避けるべく、われわれのプロジェクトは、戦前の留学生だけでなく、近年の留学生（現役留学生を含む）をも研究対象とした。校友会台湾支部の積極的な支援のもと、2 年間で約 30 名の台湾校友（そのうち約 10 名が戦前留学生）に対してインタビューを行なうことができた。インタビューのほとんどは 2001 年 9 月と 2002 年 9 月の台湾現地調査の折に実施したが、一部は日本国内において実施した。インタビューの形式に関しては、「非構造型インタビュー法」をとり、対象者のライフヒストリー（特に留学に至る経緯、同志社での学生生活、卒業後のキャリア生活）を詳細に聞き取ることに重きを置いた。また、ドキュメント類としては、校友会誌『同志社タイムス』掲載の台湾関連記事（支部通信や訪台した校友の手記など）が有用な情報源となった。

ここで「同志社と台湾留学生」をめぐる社会背景について整理する[2)]。戦前の同志社（大学・大学予科・専門学校・高等商業学校・中学・女子専門学校・高等女学部から構成）では多くの台湾留学生が学んでいた。その総数は、学籍名簿をもとにした阪口教授の整理によれば、同志社全体で 714 名にのぼり、当時の全留学生数（1,464 名）の 49％（朝鮮留学生が 46％、中国留学生が 5％）を占めた。そのピークは 1920 年代半ば〜1930 年代半ばであり、その頃には 40〜50 名の台湾留学生が同志社に在籍していた（阪口 2002 : 42-43)。

当時の同志社においてこれほどまでに多くの台湾留学生が在籍したのは、何より植民地台湾における不平等な教育制度というプッシュ要因によっていた。1990 年代末に台湾で出版され、大きな話題となった中学歴史教科書によれば、「台湾では進学が容易ではなかったため、台湾人の有志青年は勇躍日本へ赴き留学した。1945 年までに日本に留学した学生は合計で 20 万人におよび、そのなかで大学や専門学校の卒業生の総数は 6 万余人に達した。医学を学んだ者が最も多く、法律、商業、および経済を学んだ者がそれに次ぐ。留学は台湾での教育の不足を大きく補った」（台湾国立編訳館編 1998＝2000 : 91-92)。

近代日本の植民地教育に詳しい上沼八郎によれば、1920 年代半ば頃の台湾留学生の行き先としては東京が圧倒的に多く、それに次いで多かった

のが京都であった。受け入れ校としては国公立よりも私立のほうが圧倒的に多かった。なかでも明治が際立って多く、それに次いで多かったのが早稲田、慶応、中央、そして同志社であった。こうした戦前の台湾留学生の多くは当時の台湾ではごく一握りの裕福な地主農家や商家の出身であった（上沼 1978 : 148-154）。

同志社での台湾留学生第 1 号は、1905 年に同志社普通学校（旧制同志社中学の前身）2 年次に編入学した周再賜氏（1888～1969）である。周氏は、受け入れ体制が確立せず、困難な学習・生活環境のなかで刻苦勉励し、普通学校を卒業した後、同志社大学神学部に入学した。阪口（2002）によれば、「周再賜が同志社に入学し、無事に卒業を果たしたことが、一般の台湾人に知れわたったため、台湾人が子女の多くを京都や内地の学校に送るようになった」（阪口 2002 : 12-13）。

周氏とともに初期の同志社台湾留学生におけるキーパーソンが、林茂生氏（1887～1947）と陳清忠氏（1895～1960）である。林氏は 1908 年に同志社普通学校に入学し、卒業後は第三高等学校を経て東京帝国大学（中国哲学専攻）に進学し、1916 年に台湾人で最初の文学学士となった。帰台後は母校である私立長老教中学[3]の教頭に就任し、その後、アメリカのコロンビア大学大学院への留学を経て、同校の理事長に就任した。長老教中学では、林氏の個人的な影響により多くの学生が同志社に留学することになった。一方、陳氏は 1912 年に同志社普通学校に入学し、卒業後、同志社大学文学部英文学科に進学した。帰台後は母校である私立淡水中学[4]の英語教師になり、その後、同校の校長に就任した。やはり淡水中学でも、陳氏の個人的な影響により多くの学生が同志社に留学することになった。こうしたパイオニアたちが掛け橋となり、終戦までの間に 700 名を超える台湾留学生が同志社の門をくぐることになった。

戦前の同志社台湾留学生の特徴としては、①中学で学んだ者が多い、②特定の学校から来た者が多い、③卒業後に医師や実業家になった者が多い、④在学中にキリスト教徒になった者が多い、⑤男性に偏重、そして、⑥20 世紀初頭に生まれた者が多い、といった点をあげることができる。

以上の諸特徴のうち特に重要な①～③について付言する。阪口教授の整理によれば、戦前に同志社大学（大学予科・専門学校・高等商業学校を含む）で学んだ台湾留学生の総数は 126 名であったのに対し、同志社中学で学んだ台湾留学生の総数は 547 名であったという。この 547 名のなかの大多数は同志社以外の高等教育機関（特に多かったのが医科系）に進学し、80 名のみが同志社大学に進学した（阪口 2002 : 30-33）。

また、阪口教授の整理によれば、戦前に同志社中学で学んだ台湾留学生 547 名のうち半数近い 251 名が前出の長老教中学と淡水中学からの編入学者であった（阪口 2002 : 36-37）。その背景には、植民地台湾における私立中学を取り巻く不平等な教育制度（総督府の認可を受けていない私立中学の卒業生は高等教育機関への進学を認められなかった）があった。そのため、いったん同志社中学に編入し、中学卒業資格を得た後、同志社以外の高等教育機関へ進学する者が多くみられた（阪口 2002 : 84-86）。

さらに、長老教中学卒業生名簿をもとに阪口教授が留学生の卒業後の進路を整理したところ、同志社中学を卒業した後に日本各地の医学関係学校に進学した者が非常に多く、また同志社高等商業学校（現在の同志社大学商学部の前身）に進学した者も多かった。こうした傾向は、前出の中学歴史教科書における記述からもわかるように、戦前台湾のローカルエリート全般に当てはまることである。阪口教授によれば、「長老教中学在校生を

はじめとする比較的裕福な台湾家庭の子弟は、日本の厳しい差別的構造のなかで、相対的に自由な活動が可能であった自由業－医師と商業に選択の目を向けた」（阪口 2002 : 88-89）[5]。

戦後になると、一転して台湾から日本へ留学する者が激減し、同志社では 1970 年代まで台湾からの留学生受け入れが皆無に等しい状況がつづいた。その背景には、①戦前に比べて日台間の往来が不自由になったこと、②戦後の台湾ではアメリカ留学が主流化したこと、③戦後の台湾では「同志社」の名称が共産主義を連想させたこと（そのため当局ににらまれた）、④同志社側の受け入れ体制がなかなか整わなかったこと、などの諸事情があった。

1980 年代になると、状況は変わり、同志社で学ぶ台湾留学生の数が増加に転じた。われわれが調査を行なった 2000 年代初頭時点で約 70 名の戦後留学生（圧倒的多数が 1980 年代以降の入学者）を確認することができた。その背景には、①日本政府による積極的な留学生受け入れ政策（「留学生 10 万人計画」）、②日本経済の好況（日本語・日本経済・日本企業への関心の高まり）、③台湾における都市ミドルクラスの形成（教育熱の高まり）、④台湾における高等教育機会の不足、などの諸事情があった。

1980 年代初頭～2000 年代初頭の同志社台湾留学生の特徴としては、①全員が大学・大学院に入学、②特定校とのつながりがみられない、③卒業後に日本企業の台湾法人に雇用された者が多い、④女性が過半数を占める、⑤宗教色が希薄、⑥1960 年代後半以降に生まれた者が多い、といった点をあげることができる。

改めて戦前の台湾留学生と 1980 年代以降の台湾留学生を比較すると、前者は総じて特権的富裕層（植民地ローカルエリート）の出身であり、戦前の台湾では海外留学は限られた層の人々にだけ開かれた機会であった。一方、後者は総じて都市ミドルクラスの出身であり、1980 年代以降の台湾では海外留学は幅広い層の人々に開かれた機会となった。戦前の台湾における内地留学は、総じて植民地の不平等な教育制度下では得難い高等教育機会の獲得を動機とするものであった。それに対して、1980 年代以降の台湾における日本留学は、キャリア志向的な留学だけでなく、「文化消費」や「自分探し」のための留学、さらには「何となく」の留学といったように、多様な動機によってなされるものとなった。

2-3　アウトプットと社会還元

2001～02 年度に行なった調査実習では、各年度末に調査実習報告書が刊行された。以下はそれぞれの目次であり、序文が森川教授、第 1 章（総論的内容）が筆者[6]、第 2 章以下（ライフヒストリー記述）が実習生により執筆された。

2001 年度調査実習報告書

序

第 1 章　同志社と台湾留学生－歴史と現状－

第 2 章　人は芋のみに生きるにあらず！－戦前生まれのキリスト教者のライフヒストリー－

第 3 章　「老板」というありかた－現代台湾の若年ビジネスマンのライフヒストリー－

第 4 章　仕事とともに生きる台湾高学歴女性

第 5 章　学ぶということ、働くということ－現代台湾における女性の留学－

第 6 章　生活・交流からみる近年の同志社台湾留学生－ステレオタイプ的留学観の再考－

2002 年度調査実習報告書

序

第 1 章　同志社と台湾留学生－歴史的背景－

第 2 章　医師と実業家のはざまで－戦前生まれ台

湾知識人の一つのかたち－
第 3 章　宗教を信じるのは自由！－戦前生まれ台湾高学歴女性と同志社女子教育－
第 4 章　台湾人サラリーマンにとっての日系企業－80 年代以降の台湾留学生の語りから－
第 5 章　現代台湾における「老板」のフレキシビリティ－80 年代以降の台湾留学生の語りから－
第 6 章　国際移動システムのなかの台湾－ある現役台湾留学生の語りを通して－
第 7 章　台湾と日本の間に生まれて－「アイデンティティをつくる」ということ－
第 8 章　留学がもたらすもの－「マージナライゼーション効果」という視点から－

実習生たちによるライフヒストリー記述は、調査実習の立ち上げに際して森川教授が設定したリサーチクエスチョン、すなわち「外国への留学という経験が帰国後にどのように個人または社会のレベルで理解され、利用され、影響を与えるかというインターエスニックな状況で留学という文化経験がもたらす効果」に関して、様々な視点から何らかの解を導き出そうとするものであった。また、「留学経験を定点としてみるとき日本における大学教育にどのような新しい見方が可能か」というもう 1 つのリサーチクエスチョンに関して、森川教授は、2002 年度調査実習報告書の序文で次のように述べている。

> 戦前の同志社台湾留学生について理解を深めるにつれ、筆者には、戦前における同志社の教育が一点かすかに誇るに足るものをもっていたという思いが強い。…（中略）… 日本の教育は戦前・戦後を通じておおむね“日本の教育”であり、日本という限界を超えた普遍的な機能をあまり意識することがなかったといえる。戦前の台湾留学生の経験をみても、そこには差別と見下しがあり、国家主義の押し付けがあり、留学生教育とは日本という枠内での植民地の付随的エリートの養成という理念が前面にあった。だが、そうした一方、戦後の白色テロをくぐりぬけてきた同志社出身の台湾キリスト者から、再三「同志社で学んだものは社会正義への思いであった」という言葉を聞くとき、ささやかであれ同志社にはかつて国家と時代の制約のなかにあってもそれを超える何がしかの理念を日本人、留学生の区別なく伝える力があったように思える。林宗義教授によれば父君である林茂生氏はたった 1 年半であった同志社時代をその後の東京帝大、コロンビア大学の時代より懐かしく再三語っていたということであった。ひるがえって今の同志社は 1 年半滞在した留学生にそのように語らせる何かをもっているであろうか。筆者を含めてこのことは同志社人にとって重く考えなければならないことだと思う。ただ、「調査実習」の学生たちが聞き取ってきた現代の台湾留学生たちは同志社が何を与えうるかにかかわらず、もっと軽やかに留学をとらえているようである。彼らは大学を可能ないくつかの機能の一つとして捉え、主体的に個々のキャリア形成をおこなっている。「日本の大学を終え、日本人のようにキャリアを重ねる」という意識は彼らにはみられない。だが、このことは同志社が、また、日本の大学が、今後も留学生を周辺的な存在として扱いつづけてよいということを意味しないだろう。ヨーロッパの言語にはそもそも「留学」「留学生」という言葉は存在しない。本来大学に必要なのは「教育・研究」と「学生」のみなのである（森川 2003：6）。

「同志社と台湾留学生」プロジェクトに関して

特筆すべき点は、学部生対象の調査実習の枠に留まらず、台湾の有力な大学研究機関を巻き込んでの国際シンポジウムに発展していった、ということである。2002 年 9 月 19 日、国立台湾大学において「植民地教育、日本留学、台湾社会－林茂生先生記念国際シンポジウム－」（中央研究院台湾史研究所、台湾大学、同志社大学の共催）が開催された[7]。このシンポジウムの実現に当たっては、森川教授の長年の友人である陳其南教授（2002 年 9 月当時、台湾政府の無任所大臣（文化政策担当）、同志社大学客員教授）の尽力が非常に大きな意味をもった。このシンポジウム開催に至る経緯について、森川教授は、2002 年度調査実習報告書の序文で次のように述べている。

> 読者のなかには一大学の外国人留学生への聞き取り調査がどのように外国の主要研究機関が中心となるシンポジウムに拡大されるのかについて怪訝な思いをされるかたもあるだろう。そして、もちろん今回のシンポジウムの実現については陳教授という有力な研究者の協力があってはじめて可能なことであったことは間違いない。ただ、「日本への台湾留学生」というテーマは現代の台湾社会にとってきわめて重要なテーマであることを理解する必要がある。80 年代の李登輝政権以来の台湾の「本土化」の趨勢は、半世紀の苦難の時代のあと台湾がようやく自身のアイデンティティを模索することが可能となったことを意味している。そして、「国民党の台湾」を離れて、台湾と台湾人が自らを捉えなおそうとするとき、「日本（日拠）時代」は台湾がその歴史のなかに主体的で徹底的な再解釈のもとに位置づけなければならないものとなったといえる。こうした動きは当初、「不当な日本賛美」や「日帝時代へのノスタルジー」へ傾こうとする動きともなった。だが、一定の時間を経て、台湾社会には日本への反発や賛美といった情緒的な反応ではなく、台湾社会を新たな形で定位する努力の一つとして、真摯な検討を通じて日本時代を位置づけようとする動きが生じてきている。こうした努力のなかで、「日本への台湾留学生」は戦前の台湾社会の指導層を形成したという点で、きわめて重いテーマだといえる。「調査実習」としてはじまったテーマがすぐさまシンポジウムに発展したことには、台湾社会の側にこうした要請があったのである（森川 2003 : 5）。

このシンポジウムの報告者と報告タイトルは次の通りである。

MORIKAWA Makio “A Postponed Tradition : Taiwanese Ryugakusei, Doshisha, and Cultural Tradition”
陳其南「日拠台湾殖民地現代性的建立」
阪口直樹「周再賜と台湾留学生」
蔡有義（校友会台湾支部長）「戦前日本留学與地方精英網路－以同志社赴台湾校友為例－」
河口充勇「植民地エリートから台湾ミドルクラスへ－同志社校友会台湾支部の 50 年－」
逢軍「日本留学とマージナル・アイデンティティ－新台湾人のライフヒストリーを通して－」
駒込武（京都大学）「林茂生和台南長老教中学」
張妙娟（高雄応用科技大学）「『台湾教会公報』中的林茂生作品之介紹」

このシンポジウムで展開された議論を踏まえつつ、森川教授は、台湾史研究における「日本への台湾留学生」の意味について次のような問題提起を行なっている。

> シンポジウムで行なわれた発表にもみられる

ことだが、台湾研究者のなかには従来のステレオタイプ的な植民地統治観を離れて、戦前の日本統治においては圧倒的な帝国主義的支配収奪の一方で、無垢ともいえる理想主義的姿勢が混在していたこと、そしてこの矛盾する理念の並存が戦前期台湾社会の可能性と限界を規定していたことを指摘する者も多い。こうした台湾統治のあり方は、日本への台湾留学生たちにも反映されているし、さらに、植民地人としての彼らの意識は植民地統治者よりさらに屈折したものであったといえる。…（中略）… 彼らの多くは「植民地エリート」として日本帝国主義の枠のなかでのエリート化を目指した。だが、彼らもまたそれだけでとどまるものでもなかった。この点で、シンポジウムがその名を冠した林茂生氏は代表的な存在といえる。彼は初期の留学エリートとして、また、台湾最初の哲学博士として台湾知識人の代表的存在であり、台南長老教中学校長や台南師範教授として戦前期の台湾教育界の重鎮でもあった。彼はいわゆる「民族運動」について熱心ではなく、むしろ「体制的知識人」の顔をもっていたといえよう。だが、一方で彼は 1929 年という早い時期にコロンビア大学での博士論文において、日本の台湾における教育の開明性を明確に指摘し、そのうえで植民地教育としてのその絶対的な限界性を鋭く指摘した学者でもあった。そしてまた、「体制的教育者」としての顔の陰には、総督府の露骨な皇民化教育の圧力のもとでキリスト教学校の自主性をかろうじて維持してゆこうとする主体的な台湾知識人の姿がみられる。そこには否応なく日本という巨大な存在にかかわりながら、そのなかで台湾と台湾人いう存在を模索しようとする原点がみられるといえよう。林茂生氏をはじめとするこうした台湾留学生の歴史的意味については、何よりも台湾史研究において詳細な位置づけがなされねばならないだろう（森川 2003 : 5-6）。

調査実習から発展した企画は、このような台湾の学術界を巻き込んでの国際シンポジウムの開催だけにとどまらなかった。森川教授は、同志社大学今出川キャンパスにおいて台湾留学生の歴史を記念するモニュメントを建立する計画を自ら立案し、その実現に向けて各方面との調整に当たった。この計画について、森川教授は、2002 年度調査実習報告書の序文で次のように述べている。

> 関係者の間で目下、同志社に「林茂生の碑」を建立する計画もすすんでいる。これは戦前に同志社に学び、各界で活躍し、また、一部はそのことゆえに迫害され、白色テロに倒れた、多くの台湾留学生を記念するもので、すでにキャンパス内にある獄死した戦前朝鮮の詩人尹東柱の碑[8]とならんで同志社のアジア留学生を記念するものとして計画されたものである。どのような形で実現されるかは未定だが、関係各方面のおおむねの了解が得られる方向にある。このことについてもう一つの進展だが、2002 年 11 月に別の用件で訪台し、淡水で李登輝前総統と懇談する機会があったが、その折に「林茂生の碑」の計画があることをお伝えしたところ、「二・二八事件に国家として謝罪したときの元首は私であり、碑が実現するなら最適任者として私が碑文を書きましょう」という答えがあった。実現までにはまだ曲折があるだろうが、調査実習からはじまったものが様々に具体的な実りを遂げていくのはうれしいかぎりである（森川 2003 : 7）。

この「林茂生の碑」建立計画は、非常に時宜を得たものであり、実現されていれば、大きな社会

的インパクトをもたらすことになったであろうが、残念ながら、森川教授の描いた青写真の通りには進まず、立案から20年近くを経た今日においても日の目をみるに至っていない。

最後に近年の同志社における台湾との交流関係の変化について手短にふれておこう。2000年代半ば以降、同志社大学と台湾の様々な大学の間で学生交換協定が結ばれ、多くの交換留学生が往来するようになった。また、2009年には同志社大学台湾事務所が台北市内に開設され、留学支援・人的交流のための公式窓口が整備されるに至った。

2000年代初頭に実施された「同志社と台湾留学生」プロジェクトは、その後に起きた同志社・台湾間での交流関係の活性化に対して何かしらのトリガー的役割を果たしたのだろうか。この点については、また折をみて検証作業を行ないたいと考えている。

3 「台湾シリコンバレーのルーツ探し」プロジェクト

本節では、「台湾シリコンバレーのルーツ探し」プロジェクトの取り組み内容について、①研究経緯、②研究対象と社会背景、③アウトプットと社会還元という項目に沿って整理する。

3-1 研究経緯

「台湾シリコンバレーのルーツ探し」プロジェクトとは、「台湾シリコンバレー」の異名をもつ世界有数のハイテク産業集積地、新竹のルーツをなした旧台湾総督府天然瓦斯研究所（1936～45）に関する筆者と現地の研究協力者による共同調査を指している。

筆者がはじめて新竹を訪れたのは2001年12月のことである。その折の新竹訪問の目的は、同年9月に行なった「同志社と台湾留学生」プロジェクトの台湾現地調査の際に不在であった校友会台湾支部支部長（当時）の蔡有義氏（新竹市在住）に会うためであった。

台北市内より乗車した高速バスが新竹インターチェンジの手前に差し掛かった頃にみえてきたのは、「台湾シリコンバレー」の象徴的存在である新竹サイエンスパーク（新竹科学工業園区）[9]であった。その後、バスはインターチェンジを降り、国立交通大学ならびに国立清華大学のキャンパスが立地する郊外（東郊）を経由して旧市街地中心部へと向かった。サイエンスパークと旧市街地は車で20分程度という至近距離にあるものの、両者の景観はまったく異質である。前者は綿密な計画のもとに人工的につくられた空間であるのに対し、後者は一部に清代の城郭都市の風情を残しつつ、およそ無計画、無秩序に拡大を遂げてきた空間である。

このような一目瞭然の空間的乖離を目の当たりにして、筆者は、「センス・オブ・ワンダー」を掻き立てられ、いずれ機会があれば時間をかけてフィールドワークを行なってみたいと考えた。

2004年3月、筆者は、同志社大学大学院博士課程を修了すると同時に、同校に開設されたばかりの技術・企業・国際競争力研究センター（通称ITEC、2003～07年度文部科学省COE拠点）にポストドクター研究員として採用された。このポストへの応募の段階において自らの研究計画を示す必要があり、筆者は、主たる調査フィールドをそれまでの香港から台湾に移すことに決めた。それは、上記センターの「技術・企業・国際競争力の総合研究」というミッションに鑑みて、台湾のほうがいっそうそれに合致するのではないかという「計算」があったからであるが、それだけでなく、その2年前に抱いた「台湾シリコンバレー」新竹への「センス・オブ・ワンダー」があったからでもある。

研究計画書を作成するにあたり森川教授に相談したところ、「新竹は面白いと思う。国のハイテク戦略が思いのほかうまくいき、新竹は世界的に知られる存在になったけれど、それに比べて、まちの文化的な装いは洗練されていない。これからは国際的知名度に見合った文化的な装いをどうつくっていくかが地域の課題になっていくと思う。そこを突いてみたら社会学的に面白い研究になるんじゃないかな…」と背中を押された。

こうして、筆者は、「台湾シリコンバレー」新竹において、それまでの香港研究からつづく「グローバル時代における高度人材の『回遊』型移動とその社会環境」に関する調査と、新たに設定したテーマ「産業高度化・グローバル化にともなう地域再編」に関する調査を同時進行で展開することになった。

2004 年 12 月に新竹を訪れた筆者は、前出の蔡有義氏より、地域情報誌『園区生活雑誌』を発行する黄鈞銘氏を紹介された。サイエンスパークと地域社会の双方に明るい黄氏と出会ったことにより、新竹での筆者の調査活動は大きく前進することになった。

翌 2005 年の夏、筆者は 1 か月あまり新竹に滞在し、黄氏が取り組む地域情報誌事業および NPO 活動について参与観察を行なった。8 月半ばのある日、筆者は黄氏に連れられて地元の研究開発機関の退職者親睦会に参加し、そこで元エンジニアの陳培基氏と出会った。陳氏との雑談を通して、筆者は、日本統治期の新竹に天然瓦斯研究所（以下「天研」）という研究開発機関が存在したということ、そして、この天研が、1980 年代以降の台湾ハイテク産業の発展過程において極めて重要な役割を果たした財団法人工業技術研究院（以下「工研院」）のルーツであるということをはじめて知った。黄氏によれば、地元においても天研の存在を知る者は非常に少なく、その 10 年の軌跡はまさに「知られざる歴史」であった。

後日、筆者は黄氏とともに改めて新竹市内の陳氏宅を訪れ、天研時代の経験についてインタビューを行なった。その際、陳氏から天研時代の恩師である大内一三氏が 100 歳にしていまだ健在であることを知らされ、天研の歴史をいっそう深く知りたいなら、設立時のキーパーソンの 1 人である大内氏を訪問するようにと強く促された。

9 月半ばに帰国した筆者は早速、大内氏に手紙を送り、面談を依頼した。2005 年 10 月 8 日、筆者は、彼が余生を送る愛知県東海市を訪れ、大内家から程近い福祉施設内のレストランで面会した。1 回目のインタビューでは欲張らずに、まずは「ラポール」（信頼関係）の構築に専念し、許されるなら複数回のインタビューを行ないたいと考えていた。しかし、実際に筆者の前に現れた彼は 100 歳とは思えない若々しさで、話すことも聞くこともまったく問題のない様子であった。

インタビューの冒頭、大内氏は、はっきりとした口調で「自分が知っていることは何でも話す。どんな形でもいいから、自分が話したことを文章にして残してほしい」といった。その後のインタビューは極めて円滑に進行し、時間が経つにつれ、彼の記憶はますます研ぎ澄まされていった。インタビューの終盤、彼は、自身が設計・建設に深く関与した旧天研本館（後述）に言及し、この建物が台湾ハイテク産業のルーツを表象するものとして永久保存され、博物館施設にリノベーションされることを強く願っていた。

インタビューを終えて帰路につく直前に、筆者は、気候が良くなる 3 月頃に再訪したい旨を伝えたところ、大内氏からは「いつあの世に行くことになってもおかしくない身体なので、3 月まで生きていられるかわからないが、また会って昔のことをお話しすることができたらうれしい」との返答があった。

12 月半ば頃にはインタビューデータと関連資料の整理作業を終え、レポートを黄鈞銘氏に送った。そして、同じタイミングで筆者は大内氏に手紙を出し、翌春には『園区生活雑誌』で天研特集が組まれる予定であることを伝えるとともに、3 月再訪の件を改めて依頼した。しかし、その手紙に対する返事は来なかった。まさか彼が新年を迎えることのないまま、大晦日の日にこの世を去ることになるとは夢にも思わなかった。2 月半ばのある日、陳培基氏経由で大内氏逝去の知らせが筆者のもとに届いた。まったく予想もしなかった知らせに愕然とした。大内氏の遺族から陳氏に送られてきた手紙によると、病床での最後の数日間、彼は意識が朦朧とするなかで「台湾」、「新竹」、「天然ガス」といった言葉を何回も口にしたという。

インタビューのなかで大内氏は新竹への思いを次のように語っていた。

> 新竹にいたのはわずか 10 年であり、人生 100 年のうちの 10 分の 1 にすぎない。しかし、私はそこでいろいろと忘れられない経験をし、非常に充実した時間を送ることができた。だから、「第 2 の故郷」である新竹に対して今も特別な感情をもっている。

筆者は 100 年を生きた大内氏の最後の 3 ヵ月に遭遇し、まったく予期せぬ形で彼から「遺言」（消えゆく記憶の記録、旧天研本館の永久保存）を託されることになった。

大内氏逝去から 4 か月後、『園区生活雑誌』第 97 期（2006 年 4 月）において、筆者は黄鈞銘氏、何連生氏（黄氏の岳父、台湾糖業公司で工場長などの要職を務めたエンジニア、化学分野に精通し、日本語堪能）とともに特集「新竹科学城的歴史巡礼」を発表した。そこでは、主に大内氏から得られた情報をもとに、天研設立の経緯、研究開発の具体的内容、技術移転、地域産業界への貢献、後進人材育成、研究所の遺産について記述した。当初、筆者らは、日本統治期の軍事関連施設という題材ゆえ、読者の反応に対して一抹の不安を感じていた。しかし、実際に蓋を開けてみると、ネガティブな反応は一切なく、それどころか、さらに詳細な内容の続編を期待するとの声が多く寄せられた。こうした読者からのポジティブな反応に後押しされ、筆者はその後も天研の「知られざる歴史」を掘り起こす調査を継続することになった。

調査を継続するに当たって、筆者は、改めて社会学的なリサーチクエスチョンを設定しようと考えた。大内氏へのインタビューを通してみえてきた天研の実像は、戦時下植民地の軍事関連施設でありながら外部に対して「開かれた組織」であった、ということである。そこでは、「開かれた研究者」が外部の様々な関連産業、行政機関との間でインターフェースの役割を果たした。それが有効に機能したこともあって、天研と外部の様々なアクターの間には有機的連携がみられ、そこに産業クラスターのプロトタイプを看取することができるのではないだろうか。これが調査継続に踏み切った 2006 年夏頃に筆者が設定した暫定的なリサーチクエスチョンであった[10)]。

3-2　研究対象と社会背景

「台湾シリコンバレーのルーツ探し」プロジェクトは、「台湾シリコンバレー」新竹のルーツをなす天研の関係者（日本人、台湾人）を研究対象とした。いうまでもなく、キーインフォーマントは大内一三氏であり、1 回きりのインタビューで得られた貴重なデータを軸に、天研の 10 年史とその遺産をめぐる「物語」をできるかぎり詳細に記述しようと考えた。しかしながら、そのインタ

ビューで得られたデータには自ずと限界があり、大内氏の語りをもとに1つの「物語」を構築することは、まるでピースがすべて揃っていない「ジグソーパズル」の空白を、あらゆる手段を駆使して埋めてゆくという骨の折れる作業であった。この点に関して、陳培基氏はもう1人のキーインフォーマントであり、10数回、合計30時間超に及んだ彼へのインタビューは、「ジグソーパズル」の空白を大いに埋めるものであった。

大内氏、陳氏以外にも多くの天研関係者（元所員、元所員の家族、天研が技術協力した地元産業界の関係者など）へのインタビューを行なった。とはいえ、関係者へのアプローチがすべて受け入れられたわけではなく、体調不良を理由に、あるいは「歴史」への忌避感（「過去のことは語りたくない…」）から拒絶されることも少なからずあった。

また、ドキュメント類としては、国立台湾大学図書館、国家中央図書館台湾分館、国史館台湾文献館デジタルアーカイブ、神戸大学付属図書館デジタルアーカイブ（戦前期新聞経済記事文庫）などで得られたもの、天研関係者が戦後に立ち上げた親睦団体「赤土会」の会誌（陳培基氏提供）が有用な情報源となった。

ここで天研とその遺産をめぐる社会背景について整理する[11)]。天研が誕生する1930年代半ばという時期は、日本統治期台湾における大きな転換点であった。日本の台湾統治は、初期には「工業日本、農業台湾」を基本方針としたが、1930年代半ば頃になると、この方針に変化がみられるようになった。その時期、日本の中央政界において軍部が権力を掌握したことは、植民地台湾にも多大な影響を及ぼした。日本の南進政策の重要拠点と位置づけられた台湾では、それ以降、工業化が急ピッチで進められるとともに、電力開発や地下鉱物資源開発も積極的に推し進められることになった。その際に総督府・軍関係者の注目を集めたのが当時新竹周辺において豊富に産出されていた天然ガスであった。天研設立の背景には、こうした時代の要請があったのである。

1935年に発足した天研は、台湾総督府の殖産局鉱物課内に準備室が設けられただけの、まさに有名無実の存在であった。まずはスタッフのリクルートが行なわれ、日本各地から理化学分野の研究者10数名が集められた。研究所の主任技師（実質的な所長）には、海軍のエリート技官で石炭液化研究の権威であった小川亨氏が山口県の第三海軍燃料廠から迎えられた。本研究のキーインフォーマントである大内一三氏も、その折に北海道帝国大学（理学部で助手を務めた）を離れ、天研に加入している。研究所発足直前に、台湾総督府は、日本石油株式会社と日本鉱業株式会社からそれぞれ5万円（計10万円）の寄付を受けており、その寄付金が研究所施設建設の費用にあてられた。

1936年に新竹市東郊に開設された天研は、その翌年にはじまる日中戦争を背景に急激な規模拡大（予算・人員・用地の拡大）ならびに地位上昇（総督府直属の機関への昇格）を経験することになった。

天研に課されたミッションは、当時の技術水準では取り扱いが困難であったメタンを主成分とする台湾産天然ガスの工業的利用の発展に資することであった。1939年に天研が刊行した報告書『台湾の天然ガスと天然瓦斯研究所』では、その時点ですでに一定の成果をあげていた項目として、水素製造、合成石油原料ガス製造、カーボンブラック製造に関する基礎研究のほか、石炭の液化に関する研究、天然ガスの塩素化に関する研究、天然ガスの熱重合に関する研究、天然ガスと酸化鉄反応に関する研究（合成石油原料ガス製造のための研究）、エチレンと水素の重合に関する

研究、天然ガス自動車に関する研究があげられていた。天研における研究開発活動はこの頃がピークであり、その後は、戦局の悪化が天研にも暗い影を落とすことになった。

戦前・戦中の新竹においては、海軍燃料廠や海軍飛行場をはじめ多くの軍事施設が設けられたため、大戦末期になると、たびたび連合軍の爆撃機が飛来した。天研もその標的となったが、幸運にも研究所の主要な施設はほぼ無傷のまま残った。

戦後、天研は隣接の海軍燃料廠などとともに中華民国政府に接収され、中国石油公司（国営企業）傘下の研究所となった。1954 年、中国石油公司新竹研究所は中央政府経済部直属の機関に昇格し、経済部聯合工業研究所と改称された。1950 年代後半には研究所と隣接する土地に国立清華大学、国立交通大学が設立された。両校はともに戦前に中国本土で開学した理工系主体の大学であり、戦後に国民党政府とともに台湾に渡った関係者によって再開された。新竹の地が両校の所在地に選ばれたのは、戦前からつづく両校と中国石油公司との間の密接な関係によっていた。1973 年には経済部傘下の聯合工業研究所、聯合鉱業研究所、金属工業研究所が母体となって、前出の工研院が設立され、新竹に本部を置いた。

その後、工研院は、中央政府の方針を受けて、当時世界的に急激な成長期にあった電子工業分野に重点を置くようになった。1980 年には、工研院や清華・交通大学の近接する土地に新竹サイエンスパーク（中央政府国家科学委員会直属）が開設され、TSMC 社（工研院からのスピンオフ）をはじめとする多くのスタートアップ企業がインキュベートされた。こうして、1990 年代以降の新竹は「台湾シリコンバレー」と称される世界有数のハイテク産業集積地への道を邁進することになった。

天研が残した設備や土地は、戦後、新しい為政者によって大いに有効活用され、工研院をはじめとする「台湾シリコンバレー」新竹の大きな礎となった。また、天研で養成された台湾人技術者（100 名前後）の多くは、戦後も天研の後身にとどまり、現在の工研院につながってゆく研究所の発展を支えることになった。

以上では天研全体の軌跡を概観したが、以下では改めてキーインフォーマント・大内一三氏個人の軌跡に目を向ける。

研究所建設に当たって、大内氏は、弱冠 29 歳ながら、上司の小川氏より実務能力を見込まれ、用地選定から土地造成、本館をはじめとする建物の設計、行政や建設業者との折衝、開所式の企画・運営といった重要業務を「丸投げ」された。

用地選定に関しては、大内氏が主導した現地調査の結果を受けて、いくつかの候補地のなかから赤土崎の地（新竹市東郊の丘陵地）が選ばれた。当地は、主要な天然ガス産出地とのアクセスが容易であり、また、未開拓の土地が背後に控えているため用地拡張が容易であるといった「地の利」を備えていた。今日の新竹市東郊は台湾随一にして世界有数のハイテク産業集積地となっているが、そのルーツをさかのぼると、大内氏の「先見の明」にたどり着くことになる。

天研の「心臓部」というべき本館の設計・建設にかかわる様々な業務も大内氏主導で進められた。本館の設計に当たっては、個人的な関係を通して知己を得た農業気象学者（台北帝国大学教授）の意見を取り入れて、高温多湿な台湾の気候条件に合う設計を採用した。

また、大内氏は、本館内に設けられたガラス工場の立ち上げとその後の運営に関しても主導的な役割を果たした。その際には、古巣の北海道帝国大学理学部での経験と人脈（東北帝国大学理学部ともつながる）が非常に重要な意味をなした。研究所内にガラス工場が設けられたのは、研究所で

使用される高価で壊れやすい理化学ガラス器具を自給自足できればコスト削減につながるという理由によっていた。かつて北海道大学や東北大学がそうであったように、天研も既存の研究インフラを備えない土地に設けられたため、研究所の実験施設において必要不可欠な理化学ガラス器具をいかに確実かつ低コストに調達するかが重要課題となった。大内氏は、北海道大学・東北大学の先行事例を参考にしながら、両校のものと同様のガラス工場を立ち上げようと考えた。

このように研究所建設において重要な役割を果たした大内氏であったが、その後の彼を待ち受けていた現実はまさに戦争に翻弄される日々であった。研究所建設をめぐる実務から解放されて間もない 1937 年 9 月、彼のもとに召集令状が届き、その後 2 年 3 か月にわたり中国本土の戦場で過ごした。天研に復帰後は、出征中に知り合った陸軍将校から委託研究の誘いを受けた。内容は、当時台湾の陸軍関係機関で行なわれていたブタノール発酵関連事業において副産物として発生するイソプロピル・アルコールの有効利用に関するものであった。上司の説得もあって渋々受託した大内氏は、そのための設備を整えるとともに、30 名体制（うち日本人は彼を含めて 3 名）の研究チームを立ち上げた。およそ 3 年の歳月を費やして基礎研究、工業化実験を行ない、いよいよイソプロピル・アルコールを用いた合成燃料の製造を行なえるところまで漕ぎつけた。しかしながら、1943 年暮れ、戦局の悪化を背景に陸軍関係機関がブタノール発酵関連事業から撤退する決定を下したため、大内氏のプロジェクトも中止を余儀なくされた。

このように戦争に翻弄される日々を送りつつも、大内氏は、自らが身を置く社会環境に対してできるかぎり「主体的」であろうと努めた。その 1 つが地域産業界への技術協力である。天研は組織全体として地域産業界への技術協力に積極的であったが、そのなかでも大内氏は突出した存在であった。それは、彼が「研究のための研究」を志向していなかったことに加え、研究所建設の実務に携わった際に外部機関との間で豊富な人脈を得ていたこと、さらには、天研で主に担当した業務（ガス分析、ガラス工場の運営）の特性として外部機関からの業務委託が多いため、自ずと人脈が広がっていったということにも起因していた。

天研時代の大内氏がかかわりをもった地域産業は多岐にわたるが、なかでも特に重要な意味をなしたのがガラス工業とのかかわりである。先述のように、大内氏は、北海道大学・東北大学の先行事例を参考にして天研におけるガラス工場の立ち上げと運営を主導したが、興味深いことに、新竹は、ガラス製造・加工に有効な燃料（天然ガス）に事欠かず、しかも、ガラスの原料（珪砂、石灰など）まで豊富に産出されるという「地の利」を備えていた。そのため、大内氏を主たる媒体とした理化学ガラスの技術移転は、その後に大きな展開をみせることになる。

また、ガラスの軍事的需要の高まりを受けて、台湾総督府は、1939 年、天研の隣に台湾高級硝子工業株式会社（以下「高級硝子会社」）を設立し、理化学ガラス、医療用ガラス、温度計類などの高級ガラス製品の量産に着手した。大内氏は、同社の顧問となり、技術指導や人材育成に携わった。同社は戦前台湾における唯一の高級ガラス専門メーカーであり、終戦時には 200 名超（うち日本人は 20 名程度）の職工を抱えていた。戦後は中華民国政府に接収され、国営企業の傘下に入ったものの、その国営企業が 1949 年に経営不振により倒産したため、旧高級硝子会社の遺産（設備、人材、技術）も離散を余儀なくされた。その後、旧高級硝子会社で育成された台湾人技術者のなかから同社で得た専門技術をもとに自らの事業

を起こす者が多く現れた。当時の台湾において理化学ガラス関係の設備、人材、技術が揃っていたのは新竹だけであったため、彼らのもとには台湾各地の研究開発機関から多くの注文が舞い込んだ。1990 年代以降、新竹地域の理化学ガラス製造は斜陽化に向かうが、すでに当地に根付いていた理化学ガラス技術は、電子工業を中心とした新しいハイテク産業の発展を「縁の下から」支えることになった。

さらに、戦後の新竹では板ガラス（窓ガラスや鏡などに用いられる平面ガラス）の製造も盛んになるが、それは、終戦後に中華民国政府によってしばらく「留用」された大内氏が、天研の接収を担当した政府高官の陳尚文氏（日本留学経験者）に対して行なった事業提案に由来している。大内氏の離台から 7 年後の 1954 年、陳氏の主導により、新竹県竹東鎮（新竹市中心部より東南へ約 15 km、当時天然ガス、珪砂、石灰を豊富に産出）にて新竹玻璃公司が設立された。同社は、台湾ではじめて板ガラスの大量生産に成功したのを皮切りに、海外輸出、クリスタルガラスやガラスファイバーをはじめとする先端領域の研究開発活動にも積極的に挑戦するなど、台湾のガラス工業を牽引する存在であったが、1980 年代半ば頃より経営不振に陥り 1993 年に倒産した。同社で育成された人材のなかには、工研院やサイエンスパーク入居企業に転じた者、自ら事業を起こして成功した者が多くみられた。

このように、天研付設のガラス工場、高級硝子会社、新竹玻璃公司はそれぞれに台湾のガラス工業のルーツをなしており、すべてのケースにおいて大内氏が関与していた。電子工業分野の専門家ではなかったものの、彼が新竹地域に残した技術シーズは、直接的あるいは間接的に 1980 年代以降の「台湾シリコンバレー」の発展に寄与することになった。

天研時代の大内氏の功績に関して、もう 1 つ強調しておきたいことがある。それは、後進人材の育成にかかわる点である。筆者が行なったインタビューのなかで、陳培基氏は、「恩師」である大内氏の人物像を次にように評している。

> 大内さんは自分にも他人にも厳しい人で、彼に叱られたことのある台湾人はたくさんいた。でも、恨みを買うことはなかった。大内さんが他人を叱るのはすべて公的なことであって、私的なことではなかった。彼の行動はいつも一本筋が通っていた。だから、一目置かれていた。…（中略）…
>
> 天研に入ったとき、たまたま実験工場ではなく実験室に配属されたのだけれど、今思えば、それはすごく幸運なことだった。実験室と実験工場とでは仕事の内容がまったく違った。実験工場に配属された連中というのは、ただ温度をみるとか、燃料を入れるとか、いわれたことをやるだけだった。ただの肉体労働だった。我々のほうは頭を使うことを求められた。しんどかったけれど、結果としてそれでよかった。それと、大内さんが上司でよかった。大内さんは僕らと一緒にやりながらいろんなことを教えてくれた。これをやれと一方的に上から命令するだけではなかった。

天研時代の大内氏は、日本人・台湾人の分け隔てなく周囲の人間に接しようとした。自身の研究室においては、部下たちとの間で疑似学校的な、あるいは疑似家族的な関係を築こうと努めた。また、先述の理化学ガラスの技術移転に関しても、彼は、周囲の反対意見を押し切って、その「現地化」を積極的に推し進めようとした。このような植民地体制下では「非常識」とみなされたはずの姿勢は、インタビューのなかで語られた、次のよ

うな戦場体験によっていた。

> 戦争から戻ってきた後、僕は、台湾人だって日本人だって同じなんだ、区別するのはおかしいと思うようになった。何でそうなったかというと、こんなことがあった。戦場で、僕は反対しておったのだけれど、多くの兵隊が罪のない人を殺したり、面白がって家を焼いたり、いろんなことをしておった。研究所を建てたときの苦労があったもんだから、「馬鹿野郎、家を建てることがどんなに大変なことが知っているのか」と文句をいうと、僕はみんなから変わりもんだといわれた。それから、自分の子どもが生まれたばかりだったということもあって、親に死なれて迷子になった子どもなんかをみると放っておけなくて、拾って施設に連れて行ったりもした。何人も子どもを拾った。そうやって中国で戦争の惨めさを嫌というほど味わって、差別なんかしてはいかんと心底から思うようになった。

こうした経緯から、大内氏は、植民地体制下の「常識」に縛られることなく、誰に対しても公平に接しようと努めた。このような姿勢を貫いた彼は、終戦後の「留用」期間において元部下たちから様々な支援を受けるという形で報われることになった。1947 年初頭、彼は日本へ引き揚げたが、元部下たちの交流は彼がこの世を去る 2005 年までつづいた。

3-3　アウトプットと社会還元

「台湾シリコンバレーのルーツ探し」プロジェクトの最初のアウトプットは、前出の『園区生活雑誌』の特集「新竹科学城的歴史巡礼」（2006 年 4 月）であったが、それは、一般読者から好評を得ただけでなく、工研院の上層部に対しても影響を及ぼすことになった。2006 年は、1936 年の天研開設から数えて 70 年目に当たり、工研院は、その年の暮れに「工研院起源－『天然瓦斯研究所』70 周年紀念」と銘打った式典を挙行した。

興味深いことに、その折の式典の内容は、1996 年に催された 60 周年記念式典の内容と大きく異なっていた。まず、60 周年はあくまでも工研院化学工業研究所[12)]の名を冠したものであったのに対し、70 周年は天研の名を前面に押し出したものであった。また、60 周年は政府主催イベントが頻繁に催される台北のホテルを会場としたのに対し、70 周年は旧天研本館付近の会議場を会場とした。そして、60 周年にはなかった配慮として、70 周年においては天研に勤務した台湾人技術者にスピーチの機会が与えられた。代表してスピーチを行なった陳培基氏は、天研の歴史と遺産を簡単に振り返ったうえで、大内氏との思い出話を披露した。

翌日、この式典の様子を伝える記事が台湾国内の多くのメディアに掲載され、「天然瓦斯研究所台灣矽谷源頭」（天然瓦斯研究所、台湾のシリコンバレーの源流）や「工研院 70 年尋根　從天然瓦斯所壯大」（工研院 70 年ルーツ探し、天然瓦斯研究所より拡大発展）といった見出しが並んだ。

この 70 周年記念式典の内容とそれに対する台湾メディアの反応を目の当たりにして、筆者は、自らの研究に対する「追風」（社会的要請）を強く感じるようになった。

その後、筆者は、黄鈞銘氏、何連生氏、何乃蕙氏（黄氏の妻、『園区生活雑誌』編集長）の協力のもと、天研と大内氏の物語を 1 冊の著書にまとめる作業をつづけ、2009 年、『台湾矽谷尋根－日治時期台湾高科技産業史話－』を園区生活雑誌社より刊行した。メインタイトルの「台湾矽谷尋根」は、新竹の代名詞「台湾矽谷」（台湾シリコンバレー）と同時代の台湾社会を象徴するキー

ワードの1つ「尋根」（ルーツ探し）をつなぎ合わせたものである。拙著のプロローグにおいて、筆者は、キーインフォーマントである大内氏の人物像にふれ、次のように記している。

大内青年の物語は決してヒロイックなものではない。彼が語った天研での10年間は、戦時下植民地の軍事関連施設という非常に制約の多い環境に身を置く青年技師のまさに「もがき苦しみ」の軌跡であった。その10年間、彼は、研究業務にとどまらない様々な業務の遂行のために奔走し、戦争や植民地支配の理不尽な現実に苦悩し挫折しながら、それでも母国のため、組織のため、地域のため、後進のためにあらんかぎりの知恵をしぼりつづけた。結局、奮闘努力の甲斐なく、日本の敗戦により、彼は10年かけて台湾で築いたもの一切を失い、故郷へ引き揚げた。しかし、努力はまったく報われなかったわけではなく、彼が新竹に残した様々な「種」は、彼が当地を去った後、彼の思惑をはるかに超えて、大きく結実してゆくことになる。

本書で描かれる物語は、1人の日本人青年技師が「もがき苦しみ」の10年間に蒔いた「種」にまつわるエピソードを中心としたものである。

この物語を通して明らかになるのは、天研が戦時下植民地の軍事関連施設のステレオタイプ的なイメージに反し、外部に対して「開かれた組織」であり、地域産業界への技術協力に積極的であったという事実である。実際、天研を媒介として、欧米や日本の先進技術が新竹地域の産業界に移植されて根付き、ごく短期間のうちに当地において化学工業の原初的な産業クラスターが形成された。その結果、天研の遺産は後身組織のなかだけでなく、地域産業界においても受け継がれてきたのである。

この天研をめぐる物語は、今日、ハイテク産業のグローバル・サプライチェーンにおいて確固たる地位を築いている「台湾シリコンバレー」新竹の知られざるルーツを具体的に映し出すものであり、そこには単なる郷土史の次元を越えた文化的付加価値が備わっているといえよう（河口 2009 : 28-29）。

拙著『台灣矽谷尋根』は、名目的には筆者が著者、何連生氏が訳者という形をとっているが、実質的には黄鈞銘氏と何乃蕙氏を含めた4名による共著であるといえよう。筆者が主に担ったのは資料収集、関係者へのインタビュー、日本語による下原稿[13]の執筆という一連の作業であった。それが中国語に翻訳される過程においては、高度な日本語運用能力に加えて化学分野の専門知識を豊富に備える何連生氏のコミットメントが、その分野の専門ではない筆者にとって大きな助けとなった。また、編集過程においては、新竹のあらゆる地域情報に明るい黄氏夫妻のコミットメントが、ネイティブ研究者ではない筆者の弱みを補うものであった。こうした二重の「ネイティブ・チェック」を経て、筆者が作成した下原稿は格段にブラッシュアップされ、完成をみることになった。

拙著の刊行に際しては、前出の陳其南教授、李鍾熙 工研院院長（当時）[14]、蔡仁堅 元新竹市長[15]といった拙著にはおよそ不釣り合いなビッグネームから序文が寄せられた。その年の9月半ば、新竹にて拙著の新書発表会が催された。筆者と黄氏は記者や市民を前に拙著刊行に至る経緯を説明したうえで、旧天研現存施設の産業遺産[16]としての可能性を強調した。この新書発表会においては李院長から直々に大内氏の「遺言」（旧天研本館の永久保存・博物館化）への好意的な意見が述べられた。

2009 年の拙著『台灣矽谷尋根』刊行からすでに 10 年以上の歳月が流れたが、旧天研本館の永久保存・博物館化という大内氏の「遺言」はいまだ実現には至っていない。その最大の理由は、皮肉なことに、旧本館が建設から 80 年以上もの歳月を経た今日においても現役の研究施設として機能しつづけているから、つまり、保存を考えなくてはならないほどに劣化してないから、に他ならない。

その一方で、この 10 数年間に天研と深いかかわりをもつ 2 つの産業遺産の保存・活用事業が大きな進展をみせてきた。1 つは、海軍燃料廠現存施設群の保存・活用事業である。新竹の海軍燃料廠は 1943 年に開設されたものの、ほとんど機能せぬまま終戦を迎えるに至った。戦後は、接収された最新設備の多くが中国本土へ運び去られ、その跡地には中国石油公司新竹研究所、清華大学、軍事関係施設、「眷村」（戦後初期に国民党政府とともに中国本土より移住してきた外省人の居住地を指す）などが設けられた。今も跡地には高さ 60 m の巨大煙突（戦前の新竹地域で最も高い建物）が残存しており、往時の面影を偲ぶことができる。2010 年、新竹市政府は、この煙突を「歴史建築」に指定するとともに、海軍燃料廠現存施設群の保存・活用事業を実施すると発表した。その際、筆者は黄釣銘氏とともに許明財 新竹市長（当時）を表敬訪問し、筆者が収集した海軍第六燃料廠に関する資料を提供した。その後、海軍燃料廠現存施設群の保存・活用に向けた調査活動が行なわれ、2014 年、新竹市政府より調査報告書『大煙囪下的故事』（大煙突の下の物語）が刊行された。2018 年には、新竹市政府が中央政府文化部の助成プログラムへの助成金申請に成功し、それをもとに「大煙囪廠房基地眷村文化保存計画」（大煙突工場基地および眷村文化保存計画）が進められることになった（2021 年にその第 1 期が終了した）。

もう 1 つは、日本統治期に建設された水道関係施設（取水口と水源地）の保存・活用事業である[17]。15 年の歳月と約 100 万円という当時としては莫大な費用を投じて建設された新竹の水道は 1929 年に完成し、その後、長期にわたり市民生活と産業発展を支えてきた。天研は水源地に隣接しており、水道インフラの恩恵を大いに被ったであろうことは容易に想像がつく。2011 年、新竹市政府は、すでに役目を終えて久しく、荒廃が進んでいた取水口と水源地を「市定古蹟」に指定するとともに、専門家に調査を依頼した。2015 年より取水口の修復工事、周辺の景観整備が行われ、2019 年、新竹水道取水口展示館が開館した。

このように、「台湾シリコンバレー」のルーツをなす旧天研現存施設そのものは従来通り現役の研究施設として機能しつづけているが、その一方で、それを取り巻く産業遺産群の保存・活用の取り組みが今まさに急ピッチで進んでいる。大内氏の「遺言」の実現に向けて、「外堀」は確実に埋まりつつあるといえよう。

4 「出会い」による 2 つのプロジェクトの交錯

以上の 2 つの調査プロジェクトは共通して「出会い型調査」であり、それぞれの成果は、研究協力者やインフォーマントとの「共同作業」の結果である、と筆者は考えている。

改めて両プロジェクトの軌跡を振り返ってみると、多くの研究協力者やインフォーマントとの「出会い」があり、そこに至る経緯においては偶然的要素が多分に含まれている。「同志社と台湾留学生」プロジェクトにおいては、陳誠志氏の支部通信がたまたま森川教授の目に留まったこと、ほぼ同時期に森川教授と阪口教授が同じテーマに関心をもったこと、調査実習開講時期と陳其南教

授の同志社大学客員教授着任時期が重なったことなど、偶然的要素が重要な意味をなした。阪口教授の研究はわれわれのプロジェクトにとって大きな助けとなった。また、陳教授との「出会い」は、その後筆者が香港から台湾へ調査フィールドを移すに当たり非常に重要な意味をもった。

一方、「台湾シリコンバレーのルーツ探し」プロジェクトにおいては、2001 年に筆者が蔡有義氏を訪ねて新竹へ足を運んだこと（もし蔡氏が新竹在住者でなければ、筆者が新竹とつながることはなかっただろう）、黄釣銘氏に連れられて参加した会合で陳培基氏と面識を得たこと（もし陳氏がその日その場にいなければ、筆者が天研の壮大な物語とつながることはなかっただろう）、陳氏にすすめられて大内氏にアプローチしたのが 100 年を生きた大内氏の「最後の 3 か月」であったこと（もしそのタイミングを逸していれば、筆者が何年もかけて天研調査を行なうことはなかっただろう）、黄氏の岳父である何連生氏が高度な日本語運用能力と化学分野の専門知識を備えていたこと（もし何氏のサポートがなければ、拙著中国語版の出版はありえなかっただろう）など、ここでも偶然的要素は枚挙に暇がない。

冒頭でふれたように、2 つの「出会い型調査」は、もともと直接的なつながりがあったわけではないが、ある「出会い」により交錯することになった。筆者がそれに気づかされるのは、「出会い」の当日（2007 年 8 月某日）ではなく、それから 1 年半後に拙著中国語版に寄せられた蔡仁堅氏の序文原稿を目にしたときであった。「人と土地の記憶を呼び覚ます」と題された序文の末尾において蔡氏は次のように記している。

> 一昨年の夏、河口君が新竹の閑居に来られた際、父が話し相手を務め、いろんな昔話をした。この本に登場する天研所長、小川亨博士の次男、小川宣さんと父は新竹中学の同級生である。5 年前に卒業 60 周年を祝う同窓会が日本で開かれ、そこで 2 人は久方ぶりの再会を果たした。父は、住吉公学校を卒業後に淡水中学に進学したが、2 年生のときに戦況悪化のため新竹中学への転校を余儀なくされた。淡水中学でのクラス担任兼英語担当は、淡水牛津学堂出身で、同志社大学への留学経験をもつ陳清忠先生だった。この清忠先生は、淡水中学において 1921 年に台湾初の合唱団を創設。さらに、1923 年には台湾初のラグビー部を創設し、「台湾ラグビーの父」と称されている人物だ。…（中略）… 淡水中学と同志社はともにプロテスタント系のミッションスクールであり、両校の間には密接な交流の歴史があり、この物語もまた人の心を打つものである。あの日、同志社大学からやって来た河口君に誘発されたのか、父は、清忠先生との思い出を一通り語った後、突然、66 年前に封印した記憶を覚醒させた。父は、清忠先生から教わったという唱歌「朝」を口ずさみ、完璧に歌い切った。
>
> 朝は再びここにあり
> 朝は我等と共にあり
> 埋もれよ眠り　行けよ夢
> 隠れよさらば　小夜嵐
>
> 人と土地の記憶は呼び覚まされなければならない。これは河口君によって呼び覚まされた物語なのである。

筆者が蔡仁堅氏の父親と顔を合わせたのはその 1 回きりであり、しかも、調査目的の面会ではなく、1 時間ほど雑談を行なったにすぎない。とはいえ、それは、筆者にとっても非常に印象深い「出会い」であり、その夜の幸福なひと時は今も

筆者の記憶のなかに鮮明に残っている。

「人と土地の記憶を呼び覚ます」というフレーズは、まさに蔡氏父子との「出会い」を通して得られたキーワードであった。これにより、大内氏との「出会い」（そこで託された「遺言」）に端を発した「ジグソーパズル」的作業が新竹地域にとって何を意味するかが明らかとなった。大内氏から託された、消えゆく記憶の記録という作業は、結果として、彼が「第 2 の故郷」と呼んだ新竹の「人と土地の記憶を呼び覚ます」という働きをもつことになった。2019 年に刊行した拙著日本語版では、蔡氏のフレーズを借用し、メインタイトルを「覚醒される人と土地の記憶」とした。

このように、「台湾シリコンバレーのルーツ探し」プロジェクトにとって、先行の「同志社と台湾留学生」プロジェクトは、大きな「伏線」であり、蔡氏父子との「出会い」により、それを「回収」することができた。もちろん、「同志社と台湾留学生」プロジェクト自体も、このテーマとかかわりをもつ様々な人と集合体の「記憶を呼び覚ます」働きをもったのではないか、と筆者は考えている。残念ながら、この点に関する決定的な根拠資料（蔡氏の序文に匹敵するようなフィールドからのフィードバック）を用意できておらず、また折をみて当時のインフォーマントに対して追跡インタビューを行ないたいと考えている。

もとより、社会学や人類学のフィールドワークというものは、研究者とフィールド（インフォーマント）の双方向的なコミュニケーションであり、そこでは意図的要素（研究者によるフィールドへの働きかけ）と偶然的要素（往々にして研究者の意図を超越するフィールドからのフィードバック）が複雑多岐に絡まり合いながら進行していくものであるだろう。最後に筆者の記憶のなかに残っている森川教授の言葉にふれ、本稿を締めくくりたい。

フィールドワークというものは、事前に設定した仮説通りに進むことなどありえない。やる前から答えがわかっている調査なら、わざわざしなくてもいいだろう…。

〔注〕

1）本稿は、『華僑華人の事典』に掲載された拙稿「歴史を通じた日本と台湾の交流」（3,000 字程度）をベースにして、大幅に加筆修正したものである。

2）以下の整理内容について詳しくは、河口（2007）を参照されたい。

3）長老派教会の牧師によって創立された私立学校。現在の名称は私立長栄高級中学。台南市に所在。

4）長老派教会の牧師によって創立された私立学校。現在の名称は私立淡江高級中学。新北市淡水区に所在。

5）戦前同志社台湾留学生のなかには、医学界や実業界だけにとどまらず、宗教界、教育界、音楽界、スポーツ界など様々な分野で指導的役割を果たした人材が数多く輩出された（阪口 2002）。

6）2002 年度調査実習報告書の第 1 章を加筆修正したものが、河口（2007）である。また、2001 年 12 月に行なった陳誠志 元校友会台湾支部支部長（2004 年逝去）へのインタビューをもとに、そのライフヒストリーをまとめた河口（2006）を上梓している。

7）その前日には、台北市内のホテルにて校友会台湾支部の臨時総会が開催され、大谷實 学校法人同志社総長（当時）が列席した。

8）1995 年に同志社大学今出川キャンパス内に設置された「尹東柱詩碑」について詳しくは、李（2019）を参照されたい。

9）新竹サイエンスパークは、1980 年に開設された中央政府直属のハイテク工業団地であり、半導体受託生産世界 1 位の TSMC 社をはじめ世界的に名の知られたハイテク企業が多く入居している。

10）その時期、筆者は、藤本昌代 同志社大学文学部社会学科社会学専攻助教授（当時）と共同で京都伏見酒造業を対象とした調査プロジェクトを実施していた。そこでも日本酒をめぐる産業連関構造に着目した調査を行なっており、伏見調査の様々な知見は新竹調査にも活かされることになった（その逆もまた然り）。伏見調査について詳しくは、藤本・河口（2010）を参照されたい。

11）以下の整理内容について詳しくは、河口（2019）

を参照されたい。

12）化学工業研究所は、天研、中国石油公司新竹研究所、経済部聯合工業研究所の流れを汲む機関である。2006 年、組織再編により、材料與化工研究所に改称された。

13）その折の日本語原稿を大幅に加筆修正し、2019 年に日本語版（河口 2019）を上梓している。

14）李鍾熙氏は、工研院のなかでも天研の「直系」に当たる化学工業研究所の出身であるため、天研の歴史とその遺産を身近に感じられる立場にあったと推察する。

15）蔡仁堅氏は、地元新竹出身の政治家であり、1997～2001 年に新竹市長を務めた。在任期間中、民主進歩党籍（当時は野党）の革新派首長として、積極的に文化政策を推進し、注目を集めた。

16）1990 年代以降、台湾でも産業遺産に関する調査研究や保存・活用事業が活発に進められるようになった。この分野において最も影響力をもつ国際組織である国際産業遺産保存委員会（TICCIH）の国際会議が 2012 年、アジアではじめて台北で開催されるなど、近年、海外における台湾の産業遺産への関心も高い。新竹周辺は、日本統治期に軍事工業化が進められた地域であったため、特に多くの産業遺産を備えている。詳しくは、河口（2019）を参照されたい。

17）新竹市内の水道関係施設の産業遺産としての可能性に一早く気付いたのは黄釣銘氏である。1929 年刊行の日本語小冊子『新竹の水道』をたまたま発見した黄氏は、何連生氏の助力を得て、それを中国語に翻訳したうえで、新竹市政府に提供し、その保存・活用の意義を強く訴えかけた。

〔参考文献〕

藤本昌代・河口充勇，2010，『産業集積地の継続と革新－京都伏見酒造業への社会学的接近－』文眞堂.

井上順孝，1992，「宗教研究と『出会い型調査』」『宗教研究』（292），149-174.

上沼八郎，1978，「日本統治下における台湾留学生－同化政策と留学生問題の展望－」『国立教育研究所紀要』（94），133-157.

河口充勇，2003，「同志社・台湾交流の夏－社会調査実習・台湾校友会臨時総会・国際シンポジウム－」『同志社時報』（115），52-55.

――――，2006，「ある同志社台湾校友のライフヒストリー」『同志社社会学研究』（10），15-26.

――――，2007，「同志社と台湾留学生－100 年の軌跡－」『評論・社会科学』（87），1-29.

――――，2008，「産業高度化、グローバル化、地域再編－『アジアのシリコンバレー』台湾・新竹の経験－」『フォーラム現代社会学』（7），17-30.

――――，2009，『台湾矽谷尋根－日治時期台湾高科技産業史話－』園区生活雑誌社.

――――，2017，「歴史を通じた日本と台湾の交流」華僑華人の事典編集委員会編『華僑華人の事典』丸善出版，250-251.

――――，2019，『覚醒される人と土地の記憶－「台湾シリコンバレー」のルーツ探し－』風響社.

李元重，2019，「同志社大学における尹東柱詩碑建立の経緯と意義－ワンコリアの夢と新島精神の遭遇－」『同志社談叢』（39），37-61.

森川眞規雄，2002，「序」森川眞規雄編『社会調査実習報告書－同志社と台湾留学生－』同志社大学文学部社会学科社会学専攻，1-5.

――――，2003，「序」森川眞規雄編『社会調査実習報告書－同志社と台湾留学生 2002－』同志社大学文学部社会学科社会学専攻，1-7.

阪口直樹，2002，『戦前同志社の台湾留学生－キリスト教国際主義の源流をたどる－』白帝社.

台湾国立編訳館編，1998，『台湾国民中学歴史教科書－認識台湾－』＝2000，蔡易達訳『台湾国民中学歴史教科書－台湾を知る－』雄山閣.